

## 最上川と文学

梅 津 保 一

### 一 はじめに

最上川は、山形・福島両県境の西吾妻山（標高二、〇三五メートル）に源を発し、米沢盆地・山形盆地を北上し、新庄盆地に入り流路を北西に変え、庄内平野を貫流して酒田市で日本海に入る。その流路延長は二二九キロメートル、流域面積七、〇四〇平方キロメートルにおよぶ大河である。

最上川流域は、山形市をはじめ一二市二一町三村からなり、人口は約一〇〇万人で、山形県人口の約八〇パーセントを占めている。最上川のような大きな川で一つの県が一本の河川流域にふくまれる例は全国でも珍しく、一県一河川の典型とされている。

最上川は一つの統一空間であって、単なる自然ではなく、一個の文化的実体である。河川としての最上川の機能と風土は、山形県の文化を決定している。この場合、「文化」とは歴史的

建造物や文字で記された書物などだけでなく、その流域に生きる人びとの生活のしかたや精神構造の全体を指す。最上川流域の平野、山岳、市町村、土木工学、とりわけ森林の歴史であり人間の営為の歴史である。つまり悠々と流れる最上川は、ただそこにあるのではなく、自然の力に人間が参加して長い年月をかけてつくりあげ、いわば耕してきたのである。文化（カルチャー）とは、耕す（カルティヴェイト）ことを意味する。

最上川は、鉄道が敷かれるまで、物資輸送の大動脈であった。古くから舟運の要路として利用されており、米をはじめ紅花・青学<sup>あおがく</sup>などを上方に送り出すとともに、生活物資や進んだ都の文化を流域にもたらした。また、「古今和歌集」時代から歌枕として有名であり、松尾芭蕉をはじめ正岡子規・齋藤茂吉・小松均らが最上川と接し、多くの作品を残している。このように最上川は、山形県民の「母なる河」として、山形県の政治・経済・文化の基盤をなしていた。

## 二 最上川と文化

原始・古代から現代に至るまで、最上川の歴史は山形県人の営為の歴史なのである。自然と人間の一つの大きな交流のドラマでもある。

宮崎 駿プロデュース・高畑勲監督作品『おもひでぽろぽろ』（原作岡本荻・刀根夕子）は、山形が舞台である。東京生まれの東京育ちの岡島タエ子が、サラリーマンをやめて有機農業に従事している山形の青年トシオと蔵王へドライブする。途中で眼下にひろがる風景を前にして二人が対話するシーンがある。

タエ子「都会の人は森や林や水の流れなんかを見て」

トシオ「すぐ自然だ、自然だってありがたがるでしょ。でも

山奥はともかく、田舎の景色ってやつは、みんな人間がつくったものなんですよ。」

タエ子「人間が？」

トシオ「そう、百姓が」

タエ子「あの森も？」

トシオ「そう」

タエ子「あの林も？」

トシオ「そう」

タエ子「この小川も？」

トシオ「そう、田んぼや畑だけじゃないんです。みんなちゃー

んと歴史があってね。どこそこのヒイじいさんが植えたとか、ひらいたとか。大昔からタキギや落葉やキノコをとっていたとか。」

タエ子「ああ、そうか」

トシオ「人間が自然と闘ったり、自然からいろんなものをもらったりして暮しているうちに、うまいことできあがってきた景色なんですよ、これは」

タエ子「じゃ人間がいなかったら、こんな景色にならなかった？」

トシオ「うん、百姓はたえず自然からもらい続けなきゃ生きていかれないでしょ」

トシオ「だから自然にもね、ずーっと生きててもらえるように、百姓のほうもいろいろやってきたんです。」

「まあ自然と人間の共同作業っていうかな、うん。そんなのが、たぶん田舎なんですよ。」

タエ子「そうっか、それでなつかしいんだ」

水や河川の問題は、森林と切り離して考えることができない。川を守り育てるのは何といっても森林である。山形県のブナ天然林は一三万六、〇〇〇ヘクタールで全国の一五・六パーセントを占め、全国一である。「ブナの山に水筒いらず」といわれ

自然の水ガメであり、緑のダムでもある。ブナ林を水源とする雪国の川にはサケやマスがのぼり、ブナ・クリ・ナラ・トチの実をはじめ山菜やキノコも豊富である。ブナを「木へんに無」と書いて、利用価値の少ない雑木と考えるのは誤りである。

山形県では、昔から建造物にブナ材を使用している。ブナ材を用いた田麦俣のカブト造りの多層民家渋谷家住宅、立石寺根本中堂、若松寺観音堂、羽黒山正善院黄金堂など、いずれも国の重要文化財に指定されている。

「水を治める者は国を治める」「治水は治山にあり」というが、その「山」とは山林であり森林である。山形県は文字どおり山岳が多い県である。山を神仏の在所、水の源として崇め、水を注いで田畑に稔りをもたらすことを願い、ただ祈るだけでなく水を保つ森林を神木として大事にしてきた。

最上川流域の置賜地方に六三基（全国に八一基、山形県七五基）の「草木塔」「草木供養塔」がある。日本仏教の「草木国土悉皆成仏」思想を具現化したものであり、庶民信仰の文化遺産として、全国的にも注目されている。

最上川水系は、千差万別の姿で人びとに接し、数えきれない程の恩恵を与えてきた。恩恵の第一は何といっても飲み水の供給であろう。縄文時代の昔から日本人は生活拠点の第一条件として湧水地域を選んだ。

一九九三年八月二十八日の『朝日新聞』天声人語で、最上川

支流寒河江川の水をとりあげ、

その水は月山のふもとの地下水である。近ごろ流れ出ているのは百年以上も前、多分、江戸時代に月山に降った雨や雪だろうというのである。雨や、とけた雪が土にしみ込む。土や岩の間、岩の小さな穴の中などを通り、長い年月、漉されながら少しずつ下りてくる

きれいな水だと書いている。

弥生時代に水田耕作の技が導入されると、今度は灌漑のために最上川水系が活用されることになった。また、漁撈で生計をたてる人もいた。水田は自然のダムでもある。降った雨をいったん保留して国土を水害から守っている。

人間の生存と水田耕作の歴史は、長い最上川の流れに似ており、上流がなくては川の水は流れない。私たちは、祖先（上流）からの農の心と風景を子孫（下流）に伝えなければならない歴史的な義務を担っている。

古代・中世以来、最上川は、物資や文化を運ぶ重要な動脈であったことも忘れてはならない。最上川舟運は、内陸部と日本海を結ぶ交通機関として発達した。その発展には、慶長末年（一六二〇年代）の最上義光による最上川三難所（暮点・三ヶ瀬・隼）開削、寛文十二年（一六七二）の最上川河口酒田湊を

基点とした河村瑞賢による西廻海運の整備、元禄五〜七年（一

六九二〜九四）の西村久左衛門による松川舟運の開発、本流に適した艀舟（米二〇〇俵〜三五〇俵）と、上流松川や支流須川を通船した小鵜飼船（米三〇〜五〇俵積み）が必要であった。

最上川舟運は、幕藩領主の年貢米輸送路として整備されたが全国的市場に米・雑穀・紅花・青苧・真綿・蠟・漆・荏油・水油・紙・葉煙草等を移出し、塩・木綿・古手・茶・海産物などの生活物資を移入する流通路として発展した。

商人荷物のなかでは、特に最上紅花が特産物として知られ、出荷にあたっては生花を干花に加工した。紅花は、最上川三難所をさけて羽州街道を大石田河岸まで陸送され、酒田港まで最上川舟運を利用し、酒田からは海路敦賀に送り、敦賀から再び陸路をとり、琵琶湖舟運で天津に揚げられ、京都紅花問屋へ運ばれた。こうして最上紅花は京都で染料・化粧品・薬品などに加工されたのである。

最上紅花の道は、そのまま上方（京都・大阪）文化が入ってくる道でもあった。新庄・尾花沢・大石田・谷地祭の山車や祭囃子は京都の祇園祭の流れをくみ、寛政年間（一七八九〜一八〇〇）に尾花沢の鈴木清蔵父子が京都から念通寺に雅楽を伝えている。最上川流域の旧家に残る雛人形・仏壇・仏像・瀬戸物なども上方からもたらされたものが少なくない。

### 三 古代―歌枕としての最上川

最上川が文学の世界に登場するのは、わが国最初の勅選和歌集である『古今和歌集』（二〇巻・一一〇〇首）の時代、延喜五年（九〇五）のことである。

もがみ河のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり（巻二十・一〇九二）

この和歌は、東歌の中に収められた詠み人知らずの陸奥歌である。恋をうちあけられたが、「のぼればくだる」（心が通う）愛を受けられます。最上川を上ったり、下ったりしている稲船のその「いな（否）」ではありませんが、この月ばかりは都合が悪くてお逢いできません、という意味の恋の歌である。

この和歌から最上川には稲船（国の役所に納める租を積んだ船）が上り下りしていたことがわかる。「延喜式」（九〇五年）によると、最上川に全国唯一の「水駅」野後（駅馬一〇疋、伝馬三疋・船五隻、大石田町大字駒籠に比定）・遊翼（駅馬一二疋、伝馬一疋・船六隻、舟形町大字富田に比定）・佐芸（駅馬四疋、船一〇隻、鮭川村大字佐渡字真木に比定）などが置かれ「母なる河」最上川は古代においても他にかえがえたい貴重な連絡路であったのである。

川船運送は、政府役人の往来のためだけでなく、最上・村山両郡から雑物を京へ運ぶためにも利用されたと考えられる。そのため、最上川は稲船とともに「みちのく」を代表する歌枕となつて、後世の歌人たちに歌い継がれていくようになる。歌枕は、特定の連想（イメージ）をうながす言葉としての地名であり、現地を知らずに用いられる場合が多かった。

もがみがは人をくだせばいなふねのかへりてしづむもの  
こそきけ （寂然法師 続後撰 卷十・釈教歌）

もかみ河いな舟のみはかよはずでおりのぼり猶さわぐあし  
がも （源順 夫木 卷十七・冬部）

もがみ河おちくる滝のしらいと山のまゆよりくるにぞあ  
りける （源重之 夫木 卷二十六・雑部）

つよくひくつなでと見せよもがみ河そのいな舟のいかりお  
ろさで （西行上人 夫木 卷二十四・雑部）

もがみ河はやくぞまさるあまぐものほればくだる五月雨  
の比 （吉田兼好 五月雨）

最上川は、『古今和歌集』『後撰和歌集』『千載和歌集』『続後撰和歌集』『続古今和歌集』『新後撰和歌集』『新千載和歌集』『新拾遺和歌集』『新後拾遺和歌集』『新葉和歌集』『古今和歌六帖』『万代和歌集』『夫木和歌集』など数多くの歌集に登場して

おり、歌の数も七六首にのぼっている。

#### 四 中世―『義経記』にみる最上川

中世における最上川舟運の実態を示す史料はほとんどない。室町時代初期に書かれた『義経記』（東北の物語がはじめて都で出版）の中に、源義経主従が平泉に落ちのびる途中、清川（立川町）から合海（新庄市本合海）まで最上川を川船で溯る様子を記している。

この清川と申は、羽黒権現の御手洗なり。月山の禪定より北の腰に流れ落ちけり。熊野には岩田河、羽黒には清川とて流れ清き名水なり。（中略）やがて御船に乗り給ひて、清川の船頭をばいや権守とぞ申。御船支度して参らせけり。水上は雪白水増りて、御船を上（せ）かねてぞありける。これやこのはからうさの少将庄の皿島と云ふところに流されて、「月影のみ寄するはたなかい河の水上、稲舟のわづらふは最上川の早き瀬、其處とも知らぬ琵琶の聲、霞の隙に紛れる」と謡ひしも今こそ思ひ知られけれ。かくて御船を上する程に、禪定より落ちたぎる瀧あり。北の方、「是をば何の瀧といふぞ」と問ひ給へば、白絲の瀧と申（し）ければ、北の方かくぞ続け給ふ。

最上川瀬々の岩波堰き止めよ寄らでぞ通る白絲の瀧

最上川岩越す波に月冴えて夜面白き白絲の瀧

とすきみつゝ、鎧の明神、冑の明神伏拝み参らせて、たかやりの瀬と申（す）難所を上らせ、煩ひおはするところ、上の山の端に猿の聲のしければ、北の方かくぞ続け給ひける。

引きまはすかちは、弓にあらねどもたが矢で猿を射て見  
つるかな

かくてさし上せ給ふ程に、みるたから、たけ比べの杉などといふところを見給ひて、矢向の大明神を伏拝み奉り、会津（海）の津に著き給ふ。

源義経主従が北国落ちをしたのは文治三年（一一八七）の二月のことである。『義経記』の記事によって、清川・合海間の最上川で旅人や物資輸送のために川船が使われていたこと、古代以来の歌枕の伝統を受け継いでいることがわかる。

## 五 近世―最上川と芭蕉

元禄二年（一六八九）、松尾芭蕉は『おくのほそ道』紀行で最上川下り（六月三日、陽暦七月十九日）を次のように記している。

最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。碁点・隼などいふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田

の海に入る。左右山覆ひ茂みの中に船を下す。これに稲積みたるをや、稲船というならし。白糸の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人堂、岸に臨て立つ。水みなぎって舟危し。

五月雨をあつめて早し最上川

『おくのほそ道』最上川下りの記事は、わずか一三〇字の短文である。この中に「最上川」「陸奥」「山形」「碁点・隼」「板敷山」「酒田」「稲船」「白糸の瀧」「仙人堂」をとりあげている。「碁点・隼などいふおそろしき難所」は、大淀狹窄部（村山市）の三難所（碁点・三ヶ瀬・隼）であり、芭蕉らは実際には通っていない。

「水みなぎって舟危し」という急流、日本三急流（富士川・球磨川・最上川）の一つである最上川の様相を強調したかったからであろう。

「板敷山」は、最上川下流の左岸、新庄藩と庄内藩の境にそびえる海拔六三〇メートルの山である。『夫木集』に「みちのくに近き出羽の板敷の山に年ふるわれぞわびしき。よみ人しらず」とあり、歌枕である。

「酒田」は、最上川が日本海に注ぐ河口港である。

「仙人堂」は、外川神社ともいい、源義経の家来常陸坊海尊が主君の道中安全を祈念するために、この堂に籠って仙人になったといわれている。

「白糸の滝」は、最上峡の象徴で全長二三メートル。『夫木集』に源重之の「最上川滝の白糸くる人のここに寄らぬはあらじと思ふ」「最上川落ちくる滝の白糸は山の眉よりくるにぞありける」とあり、歌枕である。前述の『義経記』に北の方が詠んだ二首が載っている。

芭蕉の「五月雨をあつめて早し最上川」の句は、大石田の高野一栄亭での歌仙「さみだれをあつめてすずしもがみ川」の句形であり、五月雨で増水している最上川の急流を実際に川船で下って「危い」体験をして改作したのである。

大石田での「さみだれをあつめてすずしもがみ川」は、歌仙の発句（あいさつ）であり、涼しい風をはこんでくる最上川の豊かさ、やさしさを仮名書きで表記したのである。

本台海から急流の最上川下りを体験して、仮名書きを漢字に「すずし」を「早し」に改め、最上川の豪壮さ、はげしさを表記したのである。五月雨の最上川のイメージを仮名書きと漢字書きの二つの句形にした芭蕉の細やかな心づかいには感心する。ちなみに、「五月雨」「五月」「早乙女」の「サ」は、田の神・水の神のことである。五月とは、田植え時に、田の神・水の神がくる月である。田植えが終わると「サノポリ」、田の神・水の神が山にのぼり、山の神になるのである。「サノポリ」が訛って「サナブリ」になったという。

芭蕉の『おくのほそ道』には、芭蕉五〇句、曾良一一句、低

耳一句の六二句が載っている。そのうち川を詠んだ句は最上川の句だけであり、しかも二句も載っている。最上川以外の川もたしかに本文に登場している。阿武隈川・名取川・野田の王川・北上川・衣川・黒部川などは本文に紹介されているが、作句にまで至っていない。『おくのほそ道』の旅で、芭蕉が出会った川は数知れずある。主なる川をあげると、利根川・鬼怒川・大谷川・那珂川・白石川・阿賀野川・信濃川・犀川・九頭竜川などである。

芭蕉は、『おくのほそ道』の旅の前年に書いた『笈の小文』で、旅日記のあるべき姿に言及している。そのなかで、「かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれたれもいふべく覚侍れども黄奇蘇新のたぐひにあらざれば云事なかれ。」と述べている。この方針にしたがって、『おくのほそ道』では多くの川が無視されてしまったのであろう。歌枕になっているか、いないかが、芭蕉の川の価値基準であったようである。

そもそも芭蕉の紀行文では、川を詠んだ句が少ないのも事実である。日本の川名は五字で成り立つ川が多いので、五七五の中に詠みやすいはずなのに詠んでいない。『野ざらし紀行』では、四七句中、川を詠んだのは、同行の門人千里の「秋の日の雨江戸に指折人大井川」の一句のみである。『鹿島詣』、『笈の小文』、『更科紀行』には一句もない。こうした点からみても、最上川二句というのは破格の扱いである。

『おくのほそ道』の本文に載ったのは、前にあげた「五月雨をあつめて早し最上川」と、最上川河口酒田での「暑き日を海に入れたり最上川」である。なお、山形は日本最高気温四〇・八度（昭和八年七月二十五日）を記録している。

五月二十八日（三十日）（陽暦七月十四日（十六日））大石田での歌仙で「さみだれをあつめてすずしもがみ川」、六月一日（三日）（陽暦七月十七日（十九日））新庄での三つ物で「風の香も南に近し最上川」を詠んでいる。この句は、曾良の『俳諧書留』に「盛信亭」と前書した芭蕉の発句であり、脇句が柳風（渋谷九郎兵衛盛信の息子、塘夕ともいう、通称渋谷仁兵衛）の「小家の軒を洗ふ夕立」、第三が木端（小村善右衛門）の「物もなく麓は露に埋て」であり、芭蕉が六月二日盛信亭に招待された時の作品であろう。

平成元年九月十日、新庄市は芭蕉『おくのほそ道』三〇〇年記念と新庄市民プラザ開館記念に、芭蕉句碑「風の香も南に近し最上川」（高さ一七〇センチメートル・幅一一五センチメートル・厚さ三五センチメートル、休場石、渋谷道氏書）を盛信亭（新庄市本町山形銀行新庄支店）に近い新庄市民プラザ前に建立した。

また、この日に、七吟歌仙一卷興行、風流の発句「御尋に我が宿せばし破れ蚊や」、芭蕉の脇句「はじめてかはる風の薫物」ではじめている。ほかに「風流亭」と前書した三つ物、芭蕉の

発句「水の奥氷室尋る柳かな」、風流の脇句「ひるがほかかる橋のふせ芝」、第三が曾良の「風渡る的の変矢に鳩鳴て」を付合している。

新庄市金沢新町に「柳の清水」が復元・整備され、大正十年から金沢八幡神社にあった芭蕉句碑「水のおく氷室尋る柳かな／芭蕉翁／羽新庄雪映舎中修造、裏面に 涼しさや行先々へ最上川／蓼太／天明元年歳次辛丑十月十二日 東都宗平建 沙羅書」もその側に移した。

なお、『おくのほそ道』では、芭蕉と曾良が新庄に立ち寄ったことが全く省略されている。大石田から最上川を舟で下ったように「最上川のらんと、大石田といふ所に日和を待つ。」と書いたのは、最上川中心に紀行文をまとめるための文学的フィクションである。大石田で「わりなき一卷を残しぬ。このたびの風流ここに至れり。」を強調したい気持ちからであろう。歌仙「さみだれを」は、紀行中唯一の芭蕉真蹟歌仙である。

以上、芭蕉の最上川の句のおかげで、最上川は文学史上東北一大河となったが、芭蕉に最上川下りの文を書かせ四句も詠ませるぐらいに、最上川はやはりなによりも大河であったのである。

## 六 近代―最上川と文学

### 大久保利通と最上川

明治九年（一八七六）八月二十一日、統一山形県が成立すると、初代県令に三島通庸が任命されたが、その背景には内務卿大久保利通（一八三〇〜七八）の強い期待があった。大久保利通は、山形県成立に先立つ明治九年六月、明治天皇の奥羽地方巡幸の先発として置賜・山形・鶴岡三県を巡視し、その施政をくわしく見聞したが、とくに三島の施政に注意を向けていた。大久保は、三島が鶴岡県令として学校教育、後田林の土族授産事業などで挙げた実績に強く感銘し、またワッパ騒動の処置振りなどからも、その行政手腕を高く評価したのである（『山形県史』第四巻・近現代編上）。

大久保利通は、明治九年六月十一日午後五時、山形県権参事薄井龍之の案内で大石田に到着し、一泊。翌十二日午前六時、大石田より乗船して最上川を下り、午後二時に清川上陸。清川で鶴岡県令三島通庸の出迎えをうけ、馬車にて鶴岡へ向かった（『大久保利通日記』二、日本史籍協会叢書27所収）。日記の六月十二日の項に、「舟中偶成」と題する漢詩「雨餘新緑碧連天 曉發孤舟大石田 屈曲水流行相望 何人妙筆畫山川」を記している。六月十四日、鶴岡から清川に戻り、午前九時に乗船して最上川を溯った。「出帆今日順風ニテ舟行如矢」と書き、十二時半に本台海上陸。午後二時に清水に到着した。

正岡子規と最上川

近代文学に新風をもたらした正岡子規（一八六七〜一九〇二）が日本新聞の記者として、明治二十六年（一八九三）、『おくのほそ道』の跡追ひ紀行で山形県内に五泊している。すなわち八月六日、作並発、楯岡泊。八月七日、晴、暑熱。正午大石田に着き一泊。八月八日、最上川下る、古口に一泊。八月九日、四十八滝を経て酒田に着き一泊。八月十日、烏海山を仰ぎつつ大須郷に至り一泊。この紀行は八月二十日上野駅で終る。子規は、八月七日の大石田について『はてしらずの記』につきのように記している。

三里の道を半日にたどってやうやう大石田に著きしは正午の頃なり。最上川に沿うたる一村落にして、昔より川船の出し場と見えたり。船便は朝なりといふにここに宿る。

ずんずんと夏を流すや最上川

蚊の声にらんぶの暗きはたごかな

（『子規全集』第13巻所収）

子規が泊った大石田の旅籠屋は、大石田入口から半丁足らずの川端から船着場へ行く曲り角手前二軒目にあたる「最上屋」であったという（板垣家子夫「子規大石田旅館考」）。八月八日、子規は大石田から最上川舟下りをして、

此舟米穀を積みて酒田に出だし、又酒田より塩・乾魚を積み帰るなり。下る時順風なれば十八里一日に達し、上る時風悪しければ五日、六日をも費すといふ。(中略) 溯り来る舟幾艘人綱を引きて岸上を行く、恰も蛾の歩みつれたるさま逆流に処する困難想ふべし。我れは流に順ふて下る。川幾曲、舟機転、水緩なる時は舟除ろに動きて油の上を滑るが如く、瀬急なる処は波浪高く撃ち、盤渦廻早り流れて兩岸の光景応接に暇あらず。(中略) 本台海を過ぎて八面(向)山を廻る頃、女三人にてあやつりたる一艘の小舟、川を横ぎり来って我漕ぎつくと見れば一人の少女餅を盛ったる皿いくつとなく持ち来って客薦む。客辞すれば彼益々勉めてやまず。時にひなびたる歌などうたふは人をもてなす意なるべし。餅売り尽す頃漸くに漕ぎ去る(前掲書、『はてしらずの記』)

と書いている。

### 露伴・乙羽と最上川

明治三十年(一八九七)十月七日、幸田露伴は米沢出身の大橋乙羽を伴って常磐線で上野駅をたった。十月十八日に酒田に着いて、翌十九日から最上川沿いを旅している。

十九日、酒田を立ちて最上川を渡る。茫々たる蘆荻人をも

車をも埋めんとす。余目、狩川を過ぎて清川に昼餉したたむ。ここは川近きところにして、延帆張れる川舟のいと大きなが幾隻となく過ぐるを見る。兩岸は山迫りて、流れは水深う川幅はいと広し。上れば下る稲舟の歌も思ひ合はされて舟楫の便りよきこと悦ぶべし。古口といふところより夜に入りて、ぬば玉の闇のあやなきに最上川の渡頭を渡り、本台海の宿に一夜の枕を定む

(幸田露伴「遊行日記」、『太陽』明治三十二年三、四、七月号所収)

同行者の大橋乙羽は米沢出身で、当時、日本で最も力のあった出版社博文館の雑誌『太陽』の編集に当たっていた。乙羽は、生まれ故郷の最上川であるせいか、感慨をこめた文章になっている。

最上川の海のやうになれるに架せる橋を渡りて、また幾村かを過ぎ、清川に着きて昼餉したたむ。ここよりは始終川に沿ふて、山の腰をめぐり行くに、青き山と赤き山との間を、流るる大河は、幾日の雨を湛えしか、滔々として矢よりも速し。古口にて日は落ちたり。延帆張りて江を下れる舟の蘆荻の洲に泊るも妙に、これは楓橋の夜泊るべき宿の遠く、月無く鳥の帰へる山の根に行き暮れて、対岸の古寺に鐘の声も

寂びたり (大橋乙羽『千山萬水』、明治三十二年一月刊)

当時、新庄―酒田を結ぶ陸羽西線(鉄道)はまだ開通しておらず、露伴も書いているように、舟運にたよっていた頃である。二人ともあえて舟を使わず、磐根新道(いまの国道四十七号線)を人力車で走って旅をしている。二人はこのあと、山形、米沢から二井宿峠を越えて宮城県白石まで出て汽車で帰京した。

### 田山花袋と最上川

美しき清川の駅に近く、路は風情ある松原に懸りて、その尽くるところに、初めて最上川の溶々たる流を見た時、わが心はいかに躍り、わが胸はいかに震ひし。われは車を下りてその美しき深潭に、この身を投ぜばやとおもひぬ。(中略)何等の奇景ぞ。我は最上川をかくまで卓れたる河流とは夢にも想像したる事なかりき。路は其川の右岸を縫いて、山岳の屈曲、翠嵐の揺曳、殊に其山勢の迫って迫らざる、その河身の深くして溶々たる、最もわれの心を惹きぬ。われ天下を漫遊して、山川の美を見ること甚だ多し。されど、わが日本の地勢の狭小なるがためか、未だ山中を流れてしかも溶々大河の趣をなしたるもののあるを知らず。富士川の壮、熊野川の奇、いづれも優に天下の奇景たるに足るといへども、しかも兩岸水漲溢して、溶々船を浮ぶるに足るの景に至っては遂

に大陸の一小流だにも及ぶ能わず。(中略)今この東奥の僻地に、ゆくりなく最上川の一景を得て以てわが多年の渴をいやすを得たるはあに喜ぶべき限りにあらずや

(田山花袋「最上川」、『草枕』紀行集 明治三十八年七月刊所収)

酒田からスタートした最上川沿いの花袋の旅は、最上郡戸沢村で終っている。この旅の前、花袋は明治二十七年(一八九四)二十四歳の時に東北を初めて旅している。その紀行文『陸羽一匝』に「十月の二十日には遅くとも母の故郷なる山形の地に入るこゝたらん。其処はわが旧藩侯(館林藩秋元氏)の曾て治めし所にして国替になりたる後わが一家はその陣屋なる高櫓の村にとどまり、母は二十五歳の頃までその村に住み」とあり、山形が母の故郷であったことがわかる。

東北は花袋にとって二度目の旅、「母の故郷」の最上川をはじめて見て感激しながら、雄大な流れと自然のコントラストに惜しめない拍手を送っている。

### 河東碧梧桐と最上川

河東碧梧桐(一八七三―一九三七)は、明治三十九年(一九〇六)八月、全国遍歴を志し、同四十年十二月に一旦帰京。同四十二年四月より四十四年七月にかけて再度の遍歴を終り、

紀行『三千里』『続三千里』を著わした。この遍歴において碧

梧桐は俳句を生活に近づける新傾向運動を展開し、各地で俳三昧を行なって多大な成果を収めた。

明治四十年十月六日の記事に「きようは大石田に行って会を開くはずであったけれども、病気のため延期することにした。」とある。十月八日に大石田に来て、翌九日、「芭蕉の残した一巻（歌仙「さみだれを」）であるとして、

この地の某家に保存されておるものがある。（中略）芭蕉の筆跡の真偽は予に判然せぬけれども、世間によくある偽物と全く選を異にしておる。（中略）予は之を真筆としてみた。（中略）きよう舟を上げてその清水（対岸の来迎寺にある導者清水）を見、雨中更に舟を下して、黒瀧山に遊んだ。つの字なりに曲った最上川と、大石田に架った大橋（明治三十四年架橋）と、川を挟む杉のとびとびの森と、これらの景色をフキにして衣物の裾を延べたような稲筈とを瞰下する（羽前大石田にて）

紫陽花 肘折より来る

又た会へる話頭冬近し最上川

大石田感懐

一卷の開眼を思ふ夜寒かな

（中略）

十月十一日。晴。

無いというておった舟が急にあるとのことか夫（船頭）

が一人、早う早うと催促に來た。舟は支那の絵にあるような繡に近く苦を丸く葺いた細長いものである。その葺いた苦の下には四角な炉も切つてある。自在も鉄瓶も、上には火棚も架けてある。炉の向う側には二段作りの戸棚もあつて、船頭の膳碗鍋釜類が、キッチンと仕舞うてある。摺鉢に盛った生の青豆も見え、プーンと物を煮腐したような匂いもする。

と、最上川舟下りの様子をありのまま直写している。

阿部次郎と最上川

『三太郎の日記』で知られる阿部次郎は松山町山寺の生まれである。

したがって仙人掌は祖母の信心詣の場所として、白糸の瀧は小学生の遠足の目標として、私の幼時の記憶と截断し難く織り合されてゐる。もとより私の産まれ落ちた自然の一片として見れば、最上河は既に峡谷を出て逶迤として平野の間を流れ行く悠揚たる姿であるが、中学の三年から五年まで山形に学ぶに及んで、船で、車で、徒歩で、幾度かこの間を往復

しつゝ、私はさまざまの異なる最上河を見た。さうして幼時の印象に少年の感傷を添へて、この河と私との結縁は益々深きを加へた。最上河と―それから鳥海山と月山との感化を除き去ったら、私の自然感情は決して今日のやうな姿に發展することが出来なかつたであらう。

〔最上河〕、『阿部次郎全集』第十卷所収

山形から大石田まで十里余を徒歩して、そこから清川まで船に乗ることである。しかし大石田から本合海までの間は、猿羽根峠をめぐって水路の特別に迂余曲折してゐるところである。お北と呼ばれて鳥海山の方から吹いて来る逆風が幾日も吹き続々ときには、たとひ流下に綱手を用ゐてさへ舟行が極めて遅々として、人は船中に一泊もしくは二泊することを余儀なくされる。(中略) 本合海を出るとすぐ河の曲り目に奇巖に老松をあしらった景色があつて一寸人目をひくが、それを過ぎれば水は狭い新庄盆地の一隅を流れて、人道や田野や兩岸の低い丘陵の間を他奇なく平凡に西に向つて急ぐのみである。しかし船が古口を過ぎれば、兩岸の山が急に左右から迫つて、荘内と新庄(もっとと広く云へば最上)とを区画する天陰の関門がそこに聳立する

(前掲書「最上河」、『阿部次郎全集』第十卷所収)

この文章の最後を「まさに海に入らうとする最上河とその周囲に發達せる平野は、鳥海山や月山の中央山脈の山塊を盟友として、幼い私の魂をその懷の中に育ててくれたのである。」と結んでいる。

阿部次郎は、大石田から舟で最上川を下ったとき、猿羽根峠が黒くかすかに浮んで見えてくるころ、「アアアさばねとげだちゃアエ さばねとげだちゃエ さがだサえぐさげえ まめでれちゃ まっかんでえこのしょおするにい ずんなめれえちやずんなめれ」と船頭が歌うのを聞いた。

彼はこの歌の言葉は純粹の最上弁ではないという。「猿羽根峠だちゃ」の「ちゃ」は最上地方でも用いぬことはないが、最も多く普通に用いるのは庄内であるといっている。「酒田サ行ぐさげえ」の「サ」は京阪語の「さかえ」の庄内訛り、「さげえ」は山形辺では絶対に使わない。また「なめれ」もまた「なめろ」という最上弁と庄内弁とを区別する一つの標式。いわば庄内語は最上川を溯つてその沿岸に庄内語の勢力を植えつける。したがって一番庄内に近い新庄や、最上川筋の大石田や、昔から大石田と一体をなすほどの関係があつた尾花沢などに、庄内語の混入が多いのは当然である。

このことについて阿部次郎は「最上河」(『阿部次郎全集』第十卷所収)でつぎのように考察している。

仙台・米沢・最上地方を一つとする人種言語系統と、日本海沿岸として新潟、秋田と連結する荘内の人種言語とは、素人眼にも明らかな一つの対立である。さうしてこの二系統が最上河に泛ぶ（上り下りの）河船によって相互影響の途を見出してゐたのである。この交通路がなければ今日の私もまた今日の私として生まれて来なかったであろう。祖母も母も尾花沢から荘内に嫁に来た人である。私は荘内と最上との合の子として、荘内の自然と文化の中に生まれ落ちたのである。

阿部次郎が指摘しているように、最上川舟運の道はそのまま上方や庄内の文化が入ってくる道でもあった。最上川舟運は、社会経済的な問題であると同時に、文化史的な問題でもある。

### 齋藤茂吉と最上川

齋藤茂吉に「最上川」という短い文章がある。

十三歳の時に上山小学校の訓導が私等五人ばかりの生徒を引率して旅に出た。第一日は上山との裏山越をして最上川畔のドメキ（百目木）といふところに一泊した。ここに来ると川幅はもう余ほど広く、こんな広い川を見るのは生れて初めてである。また向うの断崖に沿うた僅かばかりの平地をば舟を曳いてのぼるのが見える。人が二、三人前こごみにのめる

やうにして綱を引いてのぼってゐる。かういふ光景もまた生れて初めてである。暮方になる。川の規模の大きいのを見てゐると、今度は小さい帆を張った舟が、反対の方に矢のやうにくだるのが見えた。これは曳舟とは違ってまた特別な印象である

（昭和十三年六月二十二日、『齋藤茂吉全集』第六巻所収）

最上川河口の酒田については、

酒田は最上川が海に入るところである。ドメキで見た威勢のよい最上川の水が、ここに来るともうのべりとしてしまつて、それが日本海と続いてゐる具合は、漫々といはうか、縹茫といはうか、少年はそんな形容詞は知らなかったけれども、何か正体の知れぬものを目前に見たのであった。また、上山では太陽が山から出て山に入るのに、ここではその渺々漫々たる変な天然のうちに雲が紅く染ってその中に太陽が入る。少年等は驚いてしまった

と書いている。  
（前掲書『齋藤茂吉全集』第六巻）

茂吉の文章は紀行文ではなく、後年になつての回想であるが最上川を見ていない者にもその様子が眼にうかぶ。ちなみに、茂吉が十三歳の年は明治二十七年（一八九四）のことで、上山尋常高等小学校高等科時代である。教師の引率で、百目木（左

沢）・志津・酒田方面に三泊旅行をし、初めて最上川を見、また海を見た時の回想記である。

昭和天皇の侍従・侍従長『入江相政日記』第二卷（朝日新聞社）の昭和二十二年（一九四七）八月十六日の条に、

上ノ山農業学校では二階のヴェランダより蔵王を御展望、晴れてよく見えた。五時二十分行在所上ノ山村尾旅館に著御。温泉旅館にお泊り遊ばされたのは御幼少の頃修善寺の菊屋にお泊り遊ばされたゞけとの事、村尾では御入浴の後、庭へ御出ましになる。夜八時より齋藤茂吉・結城哀草果両氏を召さる。侍従長・徳川・村山知事、それに予陪席。先づ 齋藤氏より郷土にお迎へ申上げたるについて御礼を申上げ、最上川の御製を賜はった御礼を申上げる。

最上川のばればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかりなる古今集の東歌について、この頃已に庄内平野が米所であったこと、稲舟とは年貢米を載せて運んだ舟の意である由も申上げる。（中略）固くならず極めてなごやかに大変面白い御進講で、お上（昭和天皇）も終始にこにこ遊ばされ、「齋藤この頃は身体の工合はいくか」といふおたづねもあり、悉く恐懼して退下した。文化人の御進講といふのはいつも非常に難有い。

とある。

「最上川の御製」とは、昭和天皇摂政時代の大正十四年（一九二五）十月、山形県に来た時のことを「広き野を流れゆけども最上川海に入るまでにござりけり」と、翌十五年の歌会始（お題「河水清」）に発表された。東宮侍従長だった入江為守（相政の父）が謹書した歌碑が旧県庁、大石田西光寺境内、酒田の日和山公園に建っている。昭和五十七年三月三十一日、県民歌に制定された。

「面白い御進講」とは、この時茂吉が「この月ばかり」の月は「女の月のさわり」の意味で、「稲舟は、いなにはあらずを導き出すための序歌、つまりいやではありまん、体の都合が悪いからという男女の肉体的な恋の歌であります」と説明したことを指している。

真壁仁は、蔵王山と最上川が齋藤茂吉の文学思想の骨格となっており、深いところで郷里を愛し、おのが文学の精神風土としていたと指摘している。

蔵王山を源とする水で日々顔を洗って少年期を籠（かご）めた山であった。した茂吉にとって、蔵王山は魂をはぐくんでくれた山であった。大石田疎開時代（昭和二十一年一月三十日～二十二年十一月三日）に飽かず眺めた最上川は、茂吉にとって母のごとく大きくすべてを包んでくれるものであった。最上川の岸に立つことはまさに母胎への回帰であった、と。

茂吉は、山形県在住の門弟たちによく「最上川は郷国の川だ  
なッス。芭蕉もりっぱな句を残している、オレも負けてはいら  
れねッス。真剣に川と取り組んでみたいッス」と、いつていた  
という。芭蕉の『おくのほそ道』最上川の項に「暮点・隼など  
いふ恐ろしき難所あり」とある三難所を見に出かけている。

(昭和二十二年)

十月十九日日曜、晴、最上川難所行

○二番ノ汽車ニテ楯岡マデ行キ、警察安達署長ノ厚意ニテ自  
動車ニテ西郷村河島村ニ行キ、基点ノ難所ヲ見、龍神社ニ詣  
ヅ、河島村工藤與惣治氏(元村長)柴田惣助(会員)西郷村  
名取江口二三男医師 ○対岸ノ大久保村ノ二藤部サン親類

(保科辰太)ニ寄り茶菓ヲタベ ○大淀村ノ三ヶノ瀬ノ難所、  
ソレカラ西郷村大字大淀ノ早房ノ難所トヤナトヲ見 ○名取  
ノ江口医院ニテ午食ノ御馳走(エリ飯、汁、林檎、ナシ、栗、  
ドウナッツ) ○徒歩ニテ楯岡ニ来リ、四時著ニテ大石田ニ  
カヘル、宗吉来書 ○駅長ニ色紙、署長ニ色紙

(『齋藤茂吉全集』第32巻、岩波書店刊所収)

この「三難所行」は、茂吉のいう「写生」、つまり何もかも  
見きわめないと理想の歌はできないと考えていたからである。

近代短歌史上最高の歌集といわれる『白き山』は、昭和二十

一年(一九四六)一月三十日に、茂吉が上山の金瓶から大石田  
に移り、聴禽書屋と名づけた二藤部兵右衛門家の離れに生活  
し、翌二十二年十一月三日大石田を去るまでの八二四首が収め  
られている。

茂吉は大石田転居早々の三月、左湿性肋膜炎に罹り、五月上  
旬まで臥床療養にとめたのである。家族と離れ、六十五歳  
の老身で大患にさいなまれ、体力も気力もすっかり衰えていっ  
たのである。

日をつぎて吹雪つれば我が骨にわれの病はとほりてゆかむ  
幻のごとく病みてありふればここの夜空を雁がかへりゆく

六月ごろから治癒に向った茂吉は、大石田近辺を歩き、最上  
川畔に佇んで川の流れをみる生活が続いた。

彼岸に何をもとむるよひ闇の最上川のうへのひとつ螢は  
最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片  
最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも

これら最上川を中心とする風土が、敗戦の現実を身にしみて  
感じていた茂吉を慰めてくれた。『白き山』には、最上川を詠  
んだ歌が二三〇首収められている。

大石田で茂吉は門人の板垣家子夫（金雄）や二藤部兵右衛門家をはじめ多くの人びとの恩顧に守られた。

ここに来て篤きなさをかうむりぬすこやけき日にも病みをする日にも

しづかなる秋の光となりにけりわれの起臥せる大石田の恩

『白き山』の後記に「大石田も尾花沢もまことに好いところである。それに元禄の芭蕉を念中に有つといよいよなつかしいところである。」（『齋藤茂吉全集』第三卷所収）と、書いている。

『古今和歌集』の時代から、時ははるかに移っても、流れ続ける最上川は、文学や芸術（絵画・写真）のモチーフとして変わらぬ素材を与えてくれる。